

BAROQUE▲SYMMETRICAL

ぱらでいん

## BAROQUE▲SYMMETRICAL:ISAMI

イサミはアヤが大好きだった。

+

アヤは硝子の様な少女だった。いや、少女と言うのも相応しくない性別を超越した美を持っていた。造形物の如き自然物。あの意味、妄想に溢れたこの時代に相応しい存在だったのかも知れない。人が妄想で心の隙間を満たすように、世界もまた妄想し、アヤの様な存在を作り上げたのかも知れない。

皆が膿み疲れた空虚な目をしていた中、アヤは真っ直ぐに前を見ていた。

皆が卑屈に腰を折り曲げ地を這っている中、アヤは背を伸ばして前を見ていた。

アヤが居るだけで、周りのバロック――

タランテラの毒に犯されつつある人々も心  
なしか明るく、明日への活力が湧いてくる  
ように感じていた。そしてイサミは、そん  
なアヤが大好きだった。

+

夕暮れ時の土手、イサミはアヤと家路を  
急いでいた。

昔からこの時間帯は逢魔が刻と言うが、  
現代では実際に世界の歪みから出てきた魔  
——異形から襲われる危険があるのだ。夕  
闇が徐々に勢力を広げる中、自然と急ぎ足  
となる。

「イサミちゃん」

アヤが突然足を止め、土手の向こう側を  
見る。川の流れの向こうに隣町が見え、地  
平線との端境にはゼロ地区が見える。心な  
しか黒い感じがするが、実際に黒いのか、  
それとも錯覚なのかはっきりしない。昨日

も今日も、ゼロ地区でバロックに犯された少年や少女の死体が見つかっている。その数は日増しに増え、新聞の紙面はバロックによる死亡記事や事件で溢れかえり、世界の歪みを伝えていた。

当然、イサミの周辺も例外でなく次々に人が死んでいった。

小学校の頃に同じクラスにいた男子が最初の犠牲者だった。彼は自分がいかに醜い肉の塊であるかという内容を延々と綴ったノートを傍らに置き、ガソリンを被って焼身自殺を遂げた。

まだバロックがバロックと言う名を得てから、高校に入学し、アヤと知り合って間もなくの事だった。イサミは確かに衝撃を受けたものの特にその少年と親しいわけもなく、親から聞いて知ったくらいだ。そんなわけで、この出来事はいつの間にか記

憶の彼方へと流れて行った。

その間にも、歪みはどんどん大きくなった。ここの辺りにも異形が出現し始め、死傷者が出るようになった。新聞も急激にバロック関連の記事が多くなり、そして、隣町の一部がゼロ地区となり、封鎖された。

+

その日もいつもと変わらない日常だった。差し込む朱い夕日、人気のないマンション、蜘蛛の巣が張ってちょっと汚いエレベーター、日常の特にこれといって代わり映えない風景だ。いつものようにスチール扉の鍵を開け、中に入る。

両親は仕事で夜まで戻らない。同じ通常地区の中が仕事場なので危険は無いのだが、何となく不安だ。それを紛らわせるようにパンを食べながら何気なく新聞を手に取り、ぱらぱらと捲る。

ふと手が止まり、何枚か前の頁に戻る。  
バロックが原因になった自殺者の欄だ。

最近では詳しい記事を書く余裕が無い程にその数が膨れ上がっている為、名前をすらすらと書いていくだけだ。

死死死死、死を紙とインクで無機質に実体化させたものが羅列された墓場をイサミの眼が走り抜ける。そこに、見慣れた筆の名があったから。嘘だということを期待しつつも目は死人の上を疾る。

あった。

そこには、中学校の頃までいつも一緒にいた友達の名前が書かれていた。

昨日、ゼロ地区で屍体が発見されたらしい。一週間ほど前、行方がわからないと彼女の母親から電話があったばかりだ。

友達だと思ってたのに――彼女は自分よりバロックを選んだのか。せめて、死ぬ前

に逢いたかった。

頭が混乱して様々な想いが去来する。心から何かが無くなった感じがした。

結局自分の友達もバロックに、異形に喰われてしまった。

悔しくて、悲しくて、許せなくて――泣いた。他人が殺された時には何も感じなかったのに、少しでも親しい人が逝くところにも泣けるとは。

自分の部屋に籠もって、ずっと泣いた。涙は止めどなく溢れ、ドロドロした気持ちを増幅させて、さらに涙が溢れる。溢れた涙で世界は歪み、ふるふると震えた。

それを繰り返し、気がついたら朝だった。泣き腫らしたせいで目の回りが赤くなっていたが世界はいつも通り、そこにあった。

昨日あんなに泣いたのが少し馬鹿らしく思えたので、親から見つからないように洗

面所でこっそり顔を洗い、いつも通りに制服を着て朝食を食べ、学校へと行った。

+

学校はいつも通り、明るい喧噪と少しの倦怠でイサミを迎え入れた。

この日常が続く限り自分はバロックに侵されない。

なんとなくそんな事を考えながら、いつも通りの教室のいつも通りの席で、いつも通りの友達といつも通りの会話をしながらいつも通りの授業が始まるのを待つ。

無論、アヤとも喋った。彼女は何故か少し哀しげな眼をしていた。

その眼がイサミにはとてもよくないものに思えた。

+

そしていつも通りに授業は終わり、下校の時刻となる。最近は夜が物騒だということ



ともあり、陽が落ちる前にほとんどの生徒が学校から出る。無論、イサミも例外でなくアヤと一緒に校門を出た。

しかし、今日はアヤの体調が悪く少し遅れてしまった。日が落ちるまで余裕はあるが、自然と足は急いでくる。

夕暮れ時の土手、イサミはアヤと家路を急いでいた。

「イサミちゃん」

アヤが突然足を止め、土手の向こう側を見る。しかし、その眼は向こうの街ではなく、更に遠くを見ている感じだった。地平線の向こうにある何かを――。

「なあに？」

イサミが声をかけると、アヤは黙って服の腕を捲った。

「……ッ！ アヤちゃん！」

そこには、細い傷が無数に入っていた。

赤黒い筋が網目のように白く透き通ったアヤの肌を蝕んでいる。

「ごめん。今まで……隠して……た……の……」

目を伏せ、消え入るような声で告白して、泣き崩れるアヤ。そこにはいつもの神秘的な美しさは存在しない、タランテラの毒に侵された少女の姿があった。その姿は酷く小さく、儂げだ。

気がついたら、アヤを後ろから抱きしめていた。自然と涙が溢れ、世界が歪む。

抱きしめた右手にすう、とアヤの手が伸びる。冷たい感触を感じたイサミを見ると、アヤは自分にくにやりと曲がった短剣を託していた。

「クリス……」

弱々しくそう呟くと優しくイサミの手をほだき、アヤはその場に立つ。そこには既

に前の瞬間までの弱々しく、儂げな少女はいない。いつも通り、いや、それ以上に毅然とした少女が立っていた。そして、少女はにっこりと笑って言った。

「私がバロックで逝く前に、私を殺して」  
その迫力にイサミはたじろぐ。たじろぎながらも両手は短剣をしっかりと握りしめ、汗でじわりと濡れている。

「イサミちゃんなら解るでしょ？ 私を、殺して……」

少し早い夜風でアヤの髪がさわさわと揺れ、艶しい雰囲気の際だたせる。今は逢魔が刻——魔が現出するに丁度良い頃合いなのだ。

「早く」

その言葉が引き金となって、イサミは至った。何故、彼女は死んだか。何故、自分  
分は泣いたか。

ふらりとアヤに向かって一步を踏み出す。  
彼女も、自分が完全に狂う前に、逃げた  
かったのだ。

そして自分は友達として、そんな彼女  
を――。

看取りたい。いや、殺したかった。

また一步。

醜い憎悪の感情ではなく、救済として。

じわじわとアヤに近づく。

あの子にはしてあげられなかったから。

あと一步。

せめてアヤは。

手を上げ、一気に振り下ろす。

## BAROQUE▲SYMMETRICAL:AYA

アヤは物心ついた頃から将来を囑望されていた。

+

かといって別に旧家や名家に生まれたわけでもなく、親が企業の重役等の社会的地位が高いところに生まれたわけでもない。この時代ではごく一般的な家庭に生まれた。ただ、字を読み始めたりしたのが他の子達より少し早かっただけだ。

しかし、アヤの両親は何故かアヤを『できる子』とし、『一番』にさせたがった。それがバロックであるかそれとも両親が言う通り、人として当然の事なのか。どちらにしろアヤは『一番』であることが当然とされ、それに満たない結果の場合、激しい

叱責を喰らった。

お約束の如く、様々な習い事にも通った。元々手を抜くのは嫌いだし、習い事でやること自体は嫌いではなかったので、そこでも他の子よりは少し良い結果を出した。

だから誉められた。

しかし中学校に入学した年の夏、アヤは倒れた。原因は心臓の先天的疾患であったらしい。普通に生活する分には問題無いが、過労とストレスによって限界を超えてしまったらしい。

流石にこの時は両親も焦り、アヤの習い事を減らすことを相談したが、アヤは言った。

「大丈夫だよ。これくらい」

何故か言ってしまった。本当はとても厭なのに、疲れているのに、口から出たのはそれを否定する言葉だった。

これが全てのきっかけだった。

+

自分の周りに沢山の貌が見えた。両親、  
習い事の先生、教師、自分を腫れ物のよう  
に扱う友達のような人々。

ひよっとして自分は、それらの貌の影で  
はないだろうか。

私なんて実体はどこにも無くて――。

+

ひよっとして、この貌達のバロックじゃ  
ないのか。

+

それからアヤは変わった。

今まで無口であまり目立たないタイプ  
だったのだが徐々に活動的になり友達も増  
え、成績も良い。判で押したような優等生  
となった。エライネスゴイネと誉められな

がら周囲から望まれた『アヤ』を忠実に再現してそのイメージを送り返すことにより、準備を始めた。

全てはささやかな復讐の為に――。

自分を作り出した世界への復讐はこれしか思いつけなかった。世界というにはあまりにも狭い気がするが、アヤにとっては病床で見た貌達こそが世界の全てだった。

ともかく貌達からの評判は上がり、それにしたがって貌も増えながらも、彼女は着実に成績を伸ばしてそれなりに『良い』とされている高校に入学した。そこでも彼女にまわりつく貌は増えてきた。ほとんどの貌とは進学でばらばらになってしまったが、新しい場所でもそれと同じくらいの貌がまわりついてきた。

+

だが、そんな中でただ一人アヤをアヤの



まま受け止めた少女が居た。

イサミというその少女は、入学式の日アヤの隣に座った少女だった。横に座るなりアヤに声をかけてきて、その明るさに押されてかアヤもつられていろいろと話した。前の学校のこと、最近のニュース、不思議と成績などについて聞かれることはなく、長らく忘れていた楽しいという感情がアヤに少し戻ってきた。

幸いにも同じクラスだったのでそれとなく自分の本音を言ってみたが、イサミはそれを肯定した上で、「もう少し楽ししたほうがいいよ」と言ってくれた。

+  
だから、アヤはイサミが大好きだった。

+  
イサミはアヤと違って、人の痛みをわかることのできる心を持っていた。だからア

ヤはイサミをととても大切に思い、悩みを相談することができた。解決なんてできなくても、共有してくれる友達がいるだけで楽になれた。そのおかげで少しだけ心も落ち着いた。しかし、夜になると闇に自分が溶けてしまいそうで何とも心が落ち着かなくなり、安定を求める為にいつもの儀式を始めてしまう。

机からくりにやりと曲がった短剣を取り出す。誰かが幸運のお守りとしてくれたクリスだ。誰だったかは忘れてしまったが、充分役にたっている。

「こうしないと、壊れちゃうからね」

窓から覗く月光をその身に受け、哀しい微笑を浮かべながらアヤは月に向かって差し出した己の白い腕にクリスを這わせる。

つう、と短剣がなぞったところから血が滲み出て床に敷いた紙の上に鮮血の華を描

く。それと共に痛みがアヤを襲い、アヤは今の躰がアヤであることの証である痛みを手に入れる。心の痛みが薄れた今、アヤを維持しているのは肉体の痛みであり、それを得ない事には本当の自分がみんなの前に出している『アヤ』に喰われてしまいそうな気がしていた。

アヤがアヤでいられるのはイサミの前と、退院してからずっと続け、躰中に無数の疵をつけてしまったこの儀式の時だけだ。

「痛く、ないよ……」

細い腕から鮮血を滴らせながら、アヤの眼からも涙が落ちた。

+

死にたい。

+

不意にそう思った。

復讐の最終段階として計画していた事だ

が、こんなにも大きく胸に響くのは初めてだ。偽りの自分に全てを喰われる前に、少しでも今の自分が残ってるうちに、全てを終わらせる。愛想良くふるまって、誰からも愛される優等生という『アヤ』ではない、心の底にある本当の想いに忠実となって、

+

今こそ世界の昇華を――。

+

必要な人しかいない、閉じられた、完璧な世界に閉じこもり、穢れた世界を突き抜ける。

そこまで考えて、アヤは苦笑した。

憎んでいたのは他ならぬ自分自身だったのだ。

クリスをバッグの中にそっと忍ばせ、アヤは最後の眠りについた。

+

次の日、アヤは清々しい気分が目覚めた。いつも憎くてしょうがない両親も気にならず、朝食を食べて学校に行く。出るとき、

「何か疲れてない？」  
と言われたのが印象的だった。

学校ではできるだけいつも通りの様子に振る舞った。ただ、少し哀しかったかもしれない。そして授業が終わり、いつも通りイサミと連れ立って土手の道を歩く。わざと気分が悪くなったふりをして、人通りの少なくなる時間まで待った。我ながら卑怯だ。沈む夕日が美しい。完璧な情景。

+

「イサミちゃん」

足を止め、最期の儀式を開始する。もつとときどきするものかと思ったら以外と楽だった。心はもはや、夕日の向こうにある

まだ見ぬ世界に到達していたのかもしれない。

「なあに？」

イサミがこちらを向くと同時に、黙って制服の腕を捲る。

初めて他人の前に、アヤの一番深い部分が露出した。

「……ッ！ アヤちゃん！」

彼女の声を聞いて、どうした訳か一気に悲しみが、後悔が、押し寄せてくる。『アヤ』の仮面に痺が入り、本音が涙と共に溢れ出る。

「ごめん。今まで……隠して……た……の……」

ふわりと暖かいものが背中を被う。とくとくという心臓の鼓動。イサミはアヤの醜い部分を見ても、それを受け入れてくれた。

だから、この娘になら。

「クリス……」

ポケットに忍ばせていた短剣をイサミに託す。

イサミの手は、とても温かかった。

+

そして、彼女に願う。

「私がバロックで逝く前に、私を殺して」  
不思議と不安や悲しみは感じなかった。

イサミはアヤの祭具を握りしめ、アヤの正面に立っている。

「イサミちゃんなら解るでしょ？ 私を、  
殺して……」

さわりと涼しい風が二人の間を薙ぐと同時に、イサミは動いた。

一歩一歩、確実に近づいてくる。

これから自分は旅立つ。

この美しい想いだけを胸に残して――。

+

夕焼けに映える美しい朱の華を咲かせ、  
アヤは旅立った。

一生で一番の笑顔を、イサミに残し  
て――。



## BAROQUE▲SYMMETRICAL

夕焼け空の土手に、少女が座っている。

最も慕っていた人の抜け殻が膝の上にある。

少女はこの人を送り届けて、とても満足していた。

その顔からは暖かな笑みが零れている。だが、少女は考える。

この人がいない今、ここにおいても無意味だと。

願わくば、この人と同じ場所へ――。

膝の上にある人を送り届けた祭具を喉にあてがう。

刹那。

愛する人に覆い被さるようにして、少女も旅立った。

+

そんな二人を祝福するように空からは今年初めての雪が、何時までも何時までも静かに降りそそいでいた。

(■ ■ ■ ■ 年四月八日作品)